

あなたの願いを叶えます。3 ―サンプル―

1

広い部屋の一角に設置されたワンルーム風のセットに、壁は一面もない。

ただ、部屋の中心側に玄関ドアだけが設置されており、その奥、セットの外側には本物としか思えない電車が一両置かれていた。

透也がベッドに並んで座る男の横顔に視線を戻すと、プレイ要望書を読み返していた男がつぶやいた。

「お客様のご希望はNTR痴漢プレイ——」

透也は緊張と羞恥で震える手をぎゅつとにぎりしめた。

この男は、桂川国光。年は三十三歳だと聞いている。スタイリッシュなグレーのスーツ。まるで大口の商談でもしているかのような真剣な瞳。肌荒れ一つないきめ細かな皮膚と、形のいい鼻。俳優やモデルと言われても疑うことなく頷いてしまうほどの美貌。

透也が桂川を初めて知ったのは、この店——ゲイ向け風俗店『あなたの願いを叶えます。』の近くの喫茶店だった。偶然入った際に見かけて目を奪われ、どうしてもまた桂川の顔を見たくてたまらず、喫茶店に通うようになった。正直に言えば、金銭的な負担は大きかった。

だからいつも、透也は苦手にもかかわらず一番安いコーヒーを頼んだ。

桂川へのあこがれが本物の恋に変わったのは、それから三か月ほどが経ってからのことだった。透也が「今日は会えなかった……」と意気消沈しながら店から出ようとした際、入店しようとした桂川とドアのところで鉢合わせた。昔ながらのその喫茶店のドアは手動で、透也に気付いた桂川がドアを開けておいてくれたのだ。お礼を口にした時に「よくいらっしやつてますよね」と言われ、透也は自分が認識されていたことを知った。

それ以降挨拶を交わすようになり、さらにタイミングが合えば会話も交わすようになり、透也の毎日には日に日に明るくなっていった。

が、それでは物足りなくなったのが、それからまた二か月が経った頃。どうしてもっと近づきたくて、透也は帰ろうとする桂川の後をつけ、桂川がこの店で働いていることを突き止めた。

そしてようやく、透也の願いが叶う時が来た。

透也の願い。桂川と恋人になりたい。いやらしく抱かれない。しかし現実になれないことはわかった。なので、偽物でもかまわなかった。こうして対面していても、連絡先すら知らないまま。

けれど勇気を振り絞ったことで、桂川が外見だけでなく中身も素敵な人なのだと知ることができた。店の

入り口からこの部屋に入るまで、桂川は透也の緊張を
ほぐすべく、たくさんの話題を振ってくれた。

そして今桂川は、これから透也とプレイする内容が
書かれた卑猥な要望書を確認している。

「すでにお聞き及びかと思いますが、『恋人役の私と同
棲中である透也さんが、電車通勤中に痴漢されて感じ
てしまう――そして私にお仕置きをされる』という流
れでいこうと思っております。問題ございませんか」

「は……はい……」

口全体が震え、喉はカラカラに渴いていた。

桂川が真剣な瞳で透也を見て、それから「どうぞ」と
テーブルに置かれたお茶を勧めた。

一礼してそれを飲み干す。

「私と透也さん――恋人ですから『さん』はおかしいで
しょうか。私は普段からどなたに対しても敬語を使う
のですが」

「差し支えなければ呼び捨てで呼んでください」

「では私のことも」

「いえ、年上の方ですから……」

桂川と透也はちょうど一回り違う。

同じ干支の素敵な男性と、これからいやらしいこと
をする――。

緊張と興奮で、思わず目をそらした。塵一つないフ
ローリングを見つめる。その間、透也の心の奥底まで見

透かすような視線を感じていた。

「わかりました。好きに呼んでくださってかまいません」

「ありがとうございます」

改めて、作られた室内を見回す。

ドア枠にはまった片開きのドアしかない異質な玄関。その左手には簡易キッチン。透也と桂川が座るセミダブルのベッド。部屋の中央に置かれた小さなテーブルの奥にはテレビがある。そしてそれらに設置された、ベッドを映すカメラが三台。これは、電車の裏にあるモニターに繋がっているという。

「この部屋で私たちは暮らしています。仕事は私の方が早く出て、帰りも遅いです。透也はどのようにして私を待っていてくれますか」

「えっ……」

そこまで決めるのか。何も考えていなかった。

「透也」

しっとりした、色っぽい声に急かされる。

「えっと……夕食の準備をして……」

「それで？」

「え……お風呂の用意……とか、ですか」

同様どころか、恋人ができたことさえないのだ。どのようにして恋人を待つかなんて想像もつかない。

「平日であっても、夜は二人で過ごせる貴重な時間で

す。一緒に風呂に入るのもいいですが、準備をして待っていていただけたらとても嬉しい」

「じゅん、び……」

何の、とは言われなくてもわかった。

「恋人同士が愛し合うための」

「っ……」

好みの声がいちいち腰をぞくぞくさせる。

「——とはいえ、この部屋にシャワー設備はないのですが」

わかっている。ここは電車痴漢プレイのための部屋だ。それに店に来るまでにちゃんと準備を済ませている。面倒くさい思いをさせないように、自分なりにしっかり広げてもきた。

「透也自身のセックスの経験は——」

「あ、ありません……」

面倒くさいと思われるだろうか。

しかし桂川は形のいい目を細めた。

「今日のうちに——」

最後まで言われたら、緊張でどうにかなくなってしまいうだった。遮るようにして伝える。

「はい。大丈夫です」

「ありがとうございます。大切な大切な透也の初めてをいただきますね」

「っ……」

せっかく回避しようとしたのに。

しかしそんな思惑もバレていたようで、桂川は満足げに口角を上げた。

「では、さっそく始めましょうか。よろしくお願いいたします」

「……よろしく願います」

この人が、桂川が恋人役をしてくれる。そう思うだけで、透也の頭の中は緊張と喜びで真っ白になった。

「では、今日のプレイの流れを一緒に確認いたしましょう」

桂川が立ち上がった。震える足で、透也も後に続く。

「今から、五日分のプレイをします。とはいえ予約時間は五時間ですので、ざっくり一日あたり一時間という計算になります」

「はい」

「基本的には私が先に出勤し」桂川が不自然に設置された玄関ドアを開けた。「その後、透也が遅れて出勤します。出勤する際は奥に見える電車に乗ってください。私たちの勤務先は別々。ですが車内アナウンスで降りるタイミングはわかりますので安心してください」

「はい」

ドアを閉めた桂川が、ベッド横に戻った。

「それから、着替えの服はベッド下のかごに入ってい

ますからそれを使ってください」

引き出されたかごを見下ろす。

「わかりました」

緊張する。いよいよ始まるのだ。

（僕、本当に桂川さんと――）

かごをベッド下に戻した桂川が立ち上がった。背が
高い。見上げると、その男らしさにぽうつとなった。

「あと、私たちの関係の進展具合ですが、まだ唇同士の
キスをしただけ、というところです。私は早く抱きたい
と思っていますが、大切にもしたい。だからまだ透也の
いやらしい顔を私は知りません。透也を抱きたい、乱れ
させたいという欲望は日々膨れ上がっています」

「っは……」

心拍数が上がっていく。もう、桂川の顔を見ていられ
なくなった。逃げるように顔を伏せる。

透也の頬に、桂川の指先が触れた。

「その我慢の分、透也が痴漢に触れたと知れば激し
く憤り、嫉妬心できついお仕置きをしてしまうかもしれ
ません」

なんだろうとされたい。されたいから透也はここ
に――。

「覚悟はいいですか、透也」

「……はい。よろしく願います」

緊張と興奮でどうにかなってしまいそうだった。

武者震いした透也の肩を、桂川がそっと抱いた。

「では、恋人の時間を過ごしましょうか」

「え——」

もうプレイが始まるのではないのか。

透也は単に家を出て、痴漢をされて帰宅して、お仕置きをされるだけ——つまり要望書にあることがすべてだと思っていた。

「イチャイチャしましょう」

桂川がふわりと笑った。その顔は整いすぎていて、まるで作り物のように見えた。

そっと抱き寄せられ、耳元でささやかれる。

「カメラの映像は、見られていますからね」

「あっ……」

動揺する透也にくすりと笑い、桂川が体を離れた。

「さあ、こちらに——」

桂川に手を取られ、隣り合ってベッドに座る。

「こちらですよ」

くす、と笑った桂川に腰を抱かれた。流れるように、足の上に対面で座らされる。

「かわいい」

「っ……や、そんな、」

重くないだろうか。においは。汗をかいてしまったらどうしよう。

「かわいいですよ。とても。こんなに顔を真っ赤に染め

て……」

すうっと細められた目。まるで本心からかわいいと言われているようで、ドギマギする。

「ぜっ、ぜんぜんっ、恋人だってできたことないし……」

童貞処女。ここでの設定ではキスは経験済みということになっているようだが、実際にはキスだってしたことがない。

「恋人は私でしょう？ それともまだセックスをしていないから、私の気持ち信じられませんか」

「あっ」

どうやらもうプレイは始まっているらしい。

自分も早く設定に入り込まなくてはいけない、と焦る。

「私は早く抱きたい……でも、大事にもしたいんです。愛しているからですよ。初めては一度しかないのもったいないんです」

「あ……や……」

これ以上恥ずかしいことを言われたら、泣いてしまいそうだ。すでにどうしたらいいか、わからなくなっている。

「おめめがうるうるしていますね。お話しているだけでそんなふうになっていては、セックスをしたら本当に泣いてしまいそうだ」

「あ……その……だ、大丈夫、です……」

どこまでしてくれるのだろうか。本当にセックスをしてくれるのだろうか。

「私の透也……」

桂川の端正な顔が近づいてきた。逃げようにも、後頭部を大きな手のひらで支えられて動けない。

（あ……あ……）

キスをされるのだろうか——桂川の唇が触れたのは鼻先だった。

小声で問われる。

「セックスの可否についてはお聞きしておりましたが、キスはまだでした。捧げていただくことは？」

「桂川さんは……いいんですか」

「したい」

即答だった。

「して……ください」

「ああ……」

桂川が熱い息を吐いた。それからゆっくりと近づいてきて、唇が熱を持つ。

（キス、してる……）

人生初めてのキス。そう意識するだけで、ペニスが一気に持ち上がった。バレてしまったらどうしよう。恥ずかしい。気付かれたくない。腰を引きたい。でも桂川の足から落ちるかもしれない。そしたら確実にバレてしまう——。

桂川がそっと唇を離した。

「柔らかい」

「っ……」

感想なんて聞きたくなかった。恥ずかしい。もう本当に、どうしたらいいかわからなかった。布団に潜り込んでしまいたい。でもそんなことはできない。

「透也はきつとえっちな子ですね。早く乱れた姿が見たい」

本当に興奮しているような視線と声色だった。桂川のペニスがどうなっているのか知りたい。けれど下を向けば意識していることが伝わってしまうし、もし視線を追われたら、透也が勃起していることも知られてしまう。

「――でも、透也はそろそろ出勤の時間です。今日、私は予定があるので休みを取りました」

予定がある。たぶん、それは痴漢されてきた透也を迎え入れるための方便だろう。

「えっと、僕は出勤……」

「ええ。お仕事ですよ」

行きたくない、と言ってしまったかった。もう少しだけ、桂川と一緒にいたい。もっとキスをされたい。

「仕事を辞めて家に入ってほしいという私のお願いを聞いてくれないのは透也の方でしょう？ 私に甘えてもらえないと言って……」

拗ねたような口調。そういう設定らしい。それなら、
行ってきますと言わなければならぬ。

「……仕事、行かないと」

「早く帰ってきてくださいね。透也が退勤する頃には
用事も終えて、私も帰宅していますから。家を出たらす
ぐに電車が発車しますよ」

「わかりました……」

桂川の足から下り、玄関に向かう。そこには靴も用意
されていた。履いてみるとサイズを知っていたかのよ
うにぴったりはまる。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい。気を付けて」

桂川の腕が伸びてきた。名残を惜しむように抱きし
められ、額にキスをされる。

「本当に、早く帰ってきてください」

「はい」

電車はすぐに発車すると言っていた。もう一度「行っ
てきます」と告げてドアを開ける。

五メートルほど先に電車の車両があった。まるで本
物のよう。

ドアが開いている。乗り込むと、内装も本物の電車と
変わらなかった。背後のドアが閉まる。

（すごい……）

反対側のドア付近に五人の男性が立っていた。みんな

な三十代から四十代くらいだろうか。どこにでもいそうな普通のおじさんたちで、乗客はそこにしかない。(たぶん、そこに立てってことだね……)

おずおずとそちらに近づくと、スーツ姿の男が一人振り返って透也を見た。

「掴まらないと、揺れますよ」

示されたドア横の手すり。そこに行けば、男たちに囲まれることになる。

(痴漢……されちゃう……)

もう、自分は桂川の恋人だという設定が脳に焼き付いていた。キスの感触。そして、セックスがしたいという誘い。早く帰ってきて、という言葉を聞いた時は本当に求められている気分だった。

「もう発車しますよ」

覚悟を決めて、男たちの間をぬってドア横の手すりに掴まる。

『ご乗車ありがとうございます。発車いたします』

アナウンスが流れると、本物の電車そっくりの揺れが起きた。ガタンガタンと小刻みに動き、時折カーブするのように傾く。

窓には液晶パネルがはめ込まれていた。都会の雑多な街並みが流れていく。

一分ほどすると、誰かが透也のすぐ真後ろに立ったのがわかった。いよいよ始まる――。

透也の背中に、わずかながら男の体が当たっていた。
揺れるとトンと軽くぶつかる。

「大丈夫？」

「っ、あ……は、はい」

声は耳元で聞こえた。緊張がピークに達する。

しかし、何も起きない。単に心配されただけなのだろうか。

いつ何がどのように始まるのかわからず、緊張が続いた。

どれほど経っただろうか。腕時計をしてきたらよかったですと思った時、背後から両手が伸びてきた。

（あ……）

その手は、透也の乳首を隠すように胸に触れた。薄いTシャツは、男の体温まで貫通させる。

「っ……」

いよいよだ――。

しかし相手は透也の反応を確認しているのか、三本の指を乳首を隠すように当てたまま動かない。

それが逆に、まるで卑猥な場所を隠されているようで透也のペニスを疼かせる。

「あ、の……」

嫌がるふりをしてみたかった。けれど思うように声が出ない。

今はプレイで、本当の痴漢ではない。それなのに、被

害女性が声を上げられないという気持ちがあったような気がした。

男の人差し指が、薄いTシャツの上を滑った。乳頭の先端を甘くこすられ、乳首が硬くなっていく。

「あ……」

初めて感じる他人の手。それが、恋人でもなんでもない、顔すら知らない相手なのだと思うと興奮した。

男は乳頭が勃起したことに気付くと、指を立ててそれをつまんだ。両方同時につままれ、引っ張られる。

「ひあっ……」

高い声が出てしまった。それでも拒否する気にはなれず、両腕を脇腹にぴたりとつける。

「掴まって。危ないよ」

また耳元で聞こえた声。若くはない。この声の主が、透也の乳首を弄んでいる。

「んっ……」

右手で手すりを握り直す。

すると男は指の腹で乳頭をくりくりと転がした。

「っ、っは、あ……」

「えっちな声だね……」

ささやくような声だった。痴漢という設定上、他の乗客に気付かれないようにしているのだろう。

「や……やめ……」

「おっぱい、膨らんでるよ」

「っ……」

「敏感な乳首だね」

男は楽しそうに言うと、手すりを持って揺れに耐える透也の乳頭をいじくりまわした。

時につまみ、時にこね、時に引つ張る。

腰が疼き、ペニスが膨らんだ。

「あ……あ……」

気持ちいい。他人の手とは、こんなに気持ちいいものなのか。

ふと、電車の揺れが止まった。男の手が胸から離れる。背後でドアの開く音がする。

しかし男の気配はまだちゃんと背後にあった。

（や……早くっ）

もっと乳首をいじってほしい。もどかしい。両方の乳首がじんじんと疼いている。

『閉まるドアにご注意ください——発車いたします』

背後で人の出入りがあるのがわかった。いったいこの空間に何人の男がいるのだろう。どれほどの男が、童貞処女の透也が淫乱であると認識しているのだろう。

電車が再び動き出した。

それと同時に、男の手が乳首に戻ってきた。

「っあ、つぶ……あ」

「声を出したら気付かれちゃうよ」

男は愉快そうに笑っていた。やめる気はないらしい。

もちろんそういう設定だからなのだが、まるで本当に痴漢に遭っている気分だった。

「あ……や……」

「乳首でイったことは？」

耳元でささやかれ、首を振る。

「そう……じゃあ覚えてみようか」

「や、無理……」

小声で返すが、男からの返事はなかった。けれど乳首から離れていく手を視線で追うと、Tシャツの裾から中に入ってきた。

「アッ……！」

「こらこら。声大きいよ」男が笑う。

布越しではない、直接の刺激。桂川にも触れられていないのに、乳首が悦んでしまっている。

「小さいおっぱいだね」

「あ……そんな……」

「でもちゃんと硬い。吸ったらどんな味がするのかな」

「あ……や、だめ……」

無理、と首を振る。けれど男は笑ったまま。

「舐めたら、指より気持ちいいよ」

本物の痴漢も、こうやってエスカレートしていくのだろうか。感じているとわかったら、さらなる快感に堕とそうとしてくるのだろうか。

ペニスを愛撫してほしいという欲望をこらえ、嫌

がっているふりをすべく首を振る。だって今、自分は桂川の恋人なのだ。

「やつ……」

無言で尻に腰を押し付けられた。尻の谷間にめり込む男の怒張。

「あ……」

「はあ……君がかわいいから、こんなになっちゃった」
興奮されている。現実では恋人もできたことがないのに、肉欲の対象として見られている。欲望を見せつけられている。

（イきたいっ……）

今すぐペニスをこすってほしかった。射精したい。イきたい。出したい。もっともっと気持ちよくなりたい。

しかし、再び電車の動きが止まった。男の手が乳首から離れ、硬いものの感触もなくなる。

『自宅前——自宅前です。お気を付けてお降りください』

「残念……またね」

「っ……」

ドアの開く音。どうやら、これで帰らなければならならしい。仕事に行くシーンはなかったが、きつと時間の関係だろう。五時間で五日分のプレイをしようと Saying していた。

呼吸を整えた透也が振り返った時、背後にはもう誰

もいなかった。近くにいる男たちも携帯をいじったり新聞を読んだりしていて、誰が痴漢だったのかはまったくわからない。

完全に勃起してしまったペニス隠すように前屈みになりながら電車を降り、数歩進んで玄関ドアを開けた。

「おかえりなさい」

「あ……」

上がり框に桂川が立っていた。いつのまにか私服に変わっている。Tシャツの上に、柔らかな生地白いシャツ。ベージュのパンツ。

「透也？　どうしました？　仕事で疲れしましたか」

「あ……いえ……ただいま帰りました……」

いつ、痴漢されたことを知られるのだろう。自分から言わないといけないのだろうか。それともなんらかのきっかけで、桂川に気付かれてしまうのか。

差し出された手を握り、部屋に入る。

「……どうしました？」

「え？」

「手、すぐく汗をかいてます」

「あつ、す、すみませんっ！」

恥ずかしい。申し訳ない。

慌てて手を引こうとするが、強い力でそれを阻まれた。

握られたままの手が熱くなる。

「汗をかくようなことが、何か？」

「あ……」

今、痴漢に遭ったと言わなければならないだろうか――。

「……ひょっとして」

「え」

「出勤前に、私が透也を抱きたいと言ったからですか？　それで緊張させてしまいましたか」

桂川が口角を上げたのを見て、痴漢されたことを言うのは今ではないと察する。

「あ――いえ、その……それもありますけど、仕事が忙しくて」

「そうですか。じゃあ今夜はゆっくり休みましょうね」
手を引かれ、ベッドに入った。布団の中で人生初の腕枕をされる。

これまでに何度も夢に見た、桂川の腕枕。愛されることを妄想して、オナニーも数えきれないほどした。

「明日は私も仕事です。先に出てしまいますが、寂しくないですか」

「寂しいけど……大丈夫です」

こめかみに贈られるキス。それからきついハグ。

「おやすみなさい。いい夢を」

「おやすみなさい」

体が近い。鼓動や息遣いさえ感じられる。

しばらく緊張感に耐えていると、数分後、桂川が体を起こした。

2

「あ……」

「すみません、起こしてしまいましたか」

「いえ、その……」

「私は出勤の準備をしますが、透也はまだ寝ていてかまいませんよ」

もう、夜が明けたことになったらしい。

「僕も起きます」

「そうですか？」

おはよう、と言ってキスをされた。胸の鼓動が速くなる。

「――今日は私服で出勤なんです。そろそろ出ますね」

「はい……」

もう少し一緒に過ごしたかった。これでは恋人である桂川という時間より、痴漢されている時間の方が長い。

けれど、それは当然だと気が付いた。プレイの希望は痴漢NTR。桂川との恋人プレイがメインなのではなく、桂川はNTRにするために存在する恋人なのだ。

桂川を追って玄関に向かう。

「行ってらっしゃい」

「行ってきます。そうだ、透也は今日はお休みでしたね。着替えをしたら、ゆっくりしててください」

今日は休みなのか。それなのに桂川は出勤。痴漢プレイも恋人プレイもしないのだろうか。

桂川が、玄関にあった時計を視線で示した。

ここに来てから、もう四十分が経っていた。最初は打ち合わせだったので、たぶんプレイ自体は始まってから二十五分か三十分か……残りは四時間半程度しかない。

「もう行かないと。ですが離れがたいです」

ぎゅっと抱きしめられ、額と鼻、最後に唇にキスをされた。二度目のキス。まだ慣れない。

桂川を見上げると、その瞳には燃えるような熱があった。

「少しでも一緒にいたい。会社の最寄り駅まで、迎えに来てくれますか」

「迎え……」

「はい。電車に乗って」

「……わかりました」

どうやら、それで電車に乗せるらしい。痴漢と帰宅デートを兼ねさせるのかもしれない。

「私の終業時間になったら、時計が鳴りますから」

頷いて、桂川が出て行くのを見送る。

一人になると、することがなくなってしまった。ひとまず、用意されていた白いＴシャツと黒い薄手のズボンに着替える。

透け感が気になって自身の体を見下ろすと、ほんのわずかに乳首が浮いているように感じられた。

（乳首……）

そういえば、ベッドで桂川は透也の勃起に気付いたのだろうか。けれど何も言われなかった。気付かなかったのか、気付かないふりをしたのか――。

この後電車に乗れば、また痴漢をされるだろう。

それを、いつ桂川に言えばいいのだろうか。それとも痴漢の最中に桂川が乗り込んできてお仕置きをされる、という流れなのだろうか。

よくわからないからこそ、ドキドキした。

そしてこの後の痴漢も、また乳首いじりで焦らされるのかと思うと興奮する。

そうしているうちに玄関の時計が鳴った。桂川を迎えに行く時間だった。

ドアを出て、目の前の電車に乗り込む。

今回もまた、反対側のドア付近に男たちが集まっていた。男たちの間に進もうと足を動かす。

しかしさっき――設定上は昨日――掘んでいた手すり、中年の男性が握っていた。

（あれ、どうしよう……）

困っていると、若いサラリーマン風の男が声を掛けてきた。片手に携帯を握っている。

「そろそろ発車しますよ」

男の視線が、ぶらさがる吊革に向いた。今回はこちらを使えということなのだろう。

乗り込んだドア側を向いて右手でつり革を握ると、男が続けた。

「両手を上げていないと、痴漢に間違われますよ」

言うだけ言って、男は携帯をいじり始める。

(たしかに……)

冤罪防止のため、両手を上げている男は多い。

ここに女性はいないが、リアルさを感じたので左手も空いた吊革を握った。

(……あ、これって……)

無防備だ。乳首をいじり放題にされてしまう。その期待から、ペニスに血が集まり始める。

電車が動き出すと、すぐに誰かが透也の背後に立つた。

下を見ていると、想像どおり両手で乳首を探っている。

「あっ」

期待に起っていた乳頭が潰れた。突然の快感に思わずいやらしい声が出る。

つり革に掴まるよう促してきたサラリーマン風の男

が透也を振り返った。

「どうしました？」

「あ、いえ……」

もう、痴漢の手は消えていた。

サラリーマン風も怪訝そうな顔で、けれど再び携帯に視線を落とす。

（もう終わり……じゃないよね？）

ドキドキしながら電車に揺られる。

勃起したペニスがつらかった。それでも乳首をいじってもらいやすいよう、頑張って背筋を伸ばしておく。

再び背後の男の手が乳首に触れた。両手の人差し指を上下に振りながら、ツンと起った乳頭を弾く。

「あっ……」

また声が出てしまった。咄嗟にサラリーマン風の男を見る。しかし携帯に夢中のようだった。

邪魔が入らなかったからか、男はさらに強く乳頭を弾いた。

「んっ、っふ、んん、んう……」

唇を噛み、嬌声をこらえる。

透也が拒否しなかったことで受け入れられたと思ったのか、男は手をTシャツに入れた。両方同時にされたのでTシャツがめくれ上がり、腹があらわになる。

今サラリーマン風の男が透也を見たら、確実に声を

掛けてくるだろう。そうしたら痴漢の手も止まってしまう。

必死に唇に力を入れる。

「っ、あ、んっ」

しかし乳首をいじられたという欲望は抑えることができなかった。胸を反らせ、痴漢の愛撫を甘受する。

「んんう、んんっ、ん、っふ、ん……」

背後からの両乳首いじり。想像していた以上に気持ちよく、射精欲がこみ上げる。

しかし男は執拗に乳頭だけをこねた。先端の平らなところを優しくこすったり、電車の揺れに任せて不規則にこすったり、伸ばすように強く引っ張ったり……と思うとまた優しく表面を撫でてくる。

（イきたいっ……）

しかし乳首への刺激だけでは射精できない。

「っはん、ん、ン、んう、あっ」

足をすり寄せ、足踏みしながら欲を抑え込む。

すると、それを邪魔するように背後から腰を押し付けられた。

（あっ……）

また、男のペニスが起っている。

興奮されている。オカズにされている。

ぐっと男が腰を押した。力が強く、たたらを踏む。

（すご……）

乳首を揉みながら、ぐっぐつと何度も腰を押し付けられる。

（もしかして、オナニーされてる……？）

こすり付けられているわけではないが、明らかに透也の尻でペニスを刺激していた。

（うそ……）

こんなことまでされるとは思っていなかった。嫌悪感はないが、驚きに頭が働かなくなる。

「っは……」

男の吐息。やはり感じている。

「乳首、こりこりしてる」

さっきの——設定上は昨日の痴漢とは違う男の声だった。

「っあ……」

「おっぱい、最高だ……」

感じ入った声が、透也の耳を犯す。

「クリ乳首、最高だっ」

「っ……やつ」

淫らな呼称。クリトリスを持ったことも、見たことも触れたこともないが、それが快感を得るためだけに存在することや、男とは比較にならないほど強い快感を得られる器官だということは知っている。

「っは、っは、つく——！」

男が息をのみ、腰の動きを止めた。太い指も、乳頭を

きつくつまんだまま停止している。

『お降りのお客様は——』

アナウンスが鳴り、電車の動きが止まった。透也の後方でドアが開き、背後の気配が消えていく。

（射精……してた……）

誰かが、どこかの大人の男が自分の乳首に興奮して射精までした——そう思ったら、急に別世界に入り込んだような落ち着かない気分になった。

「透也」

突然呼ばれ、背後を振り返る。

「あっ……か、桂川さん……」

「お迎え、ありがとうございます」

「いえ……」

やっぱりかっこいい。外見も、声も好み。

しかし今は、顔を合わせていたくなかった。だって飢えている。知らない男に乳首をいじられ、射精され、体は熱を保ったまま。

「かわいい私の透也。不埒な男は現れませんでしたか」

「え……」

「痴漢。最近多いと聞きますから。女性だけでなく、かわいい男も狙われるそうなんです。それを、家を出た後に思い出しまして。迎えなんて頼まなければよかったと、仕事中ずっと後悔していたんです」

「あ……いえ、その……」

「ああ、ドアの手すりが空いていますよ。吊革より安定しますから、あちらに行きましょう」

手を引かれ、男たちの間をぬってドア前に移動した。今度は誰もおらず、手すりに掴まる。

それを待っていたようなタイミングで電車が動き出した。

「お仕事、お疲れ様でした」

「透也に早く会いたいと思っていたので、長く感じました。やっぱり休日は合わせないとダメですね」

「僕も寂しかったです」

あくまでイメージプレイだと思えば、恥ずかしいことでも口にできた。けれどやっぱり顔が熱くなって、隠すように窓の外の方を向く。

映像は、電車が川にかかる橋を渡っていることを示していた。

「……透也」

真剣な声で呼ばれたのは、橋を過ぎた時だった。

「はい」

振り返ると、桂川の顔が憤怒に染まっていた。

「え……」

「透也、どういうことですか」

「え、何がですか」

「何もなかったんですよね？」

くく略く

「でも、明日は休日ですから。透也もお休みですから、たくさんイチャイチャして過ごしましょうね」

そういう設定なのか。

痴漢されれば興奮する。射精もしたい。けれど、桂川と過ごせるのなら嬉しい。

「では、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

気を付けて、と言うとキスをされた。きつい抱擁の後、桂川が部屋を出て行く。

用意された服は、今回も簡素なものだった。Tシャツとウエストがゴムのズボン。それに着替えたところで、玄関の時計が鳴った。

部屋の外に出て、電車に乗り込む。

車内には男性が五人、バラバラのところに立っていた。透也はドア前に立って手すりを握り、動き始めた電車の揺れに耐える。

誰かが、透也の背後に立った。

期待。そしてその期待を察知されたくないという羞恥。目を閉じてうつむく。

「おはよう。えっちな皮被りくん」

「っ……！」

突然、右の耳元で声を掛けられた。聞き覚えのある声。

でもどの痴漢だったかはわからない。

「あ、の……」

今度は、左の耳元にも声を吹き込まれた。

「昨日はオナニーしたのかな」

別の、こちらにもまた聞き覚えのある声だった。でもやはりどの痴漢だったかはわからない。わかっているのはただひとつ——今、透也は痴漢に挟まれている。

うつすらと目を開ける。右から伸びて来た手が乳首に触れた。

「あっ」

「ああ、今日も守られてる。痴漢対策で乳首を守るなんてえっちだね」

「ちんちんは——おっと、こっちもか」今度は左の男性の声。

「じゃあ、ここはどうか」

どちらかの手が、ズボン越しに尻の割れ目を辿った。そこは無防備だ。桂川には何もされていない。

「っ……」

「いい反応だ。それに何も無い。アナルプラグも入っていないようだ」

下着の中に手が入ってきた。尻を撫でられて身をよじるが、ぬるぬるした丸い何かをアナルの中に入れた。

「ひっ！　っあ、……なに……」

「熱でとけるローションだよ。ここでローションボトルを突っ込むわけにはいかないからね」

準備のいい痴漢がくつくつと笑う。手慣れている——と考えて、そういう店なのだから当然だと納得する。

「体温が上がれば、とけるのが早くなるけど」

「乳首もちんちんも守られてるからなあ。どうする？」

「とりあえず感度上げようか」

いったい何をされるのだろう。

プレイだとわかっているのに、恐怖心はない。けれど緊張感が増してきて、息が苦しくなった。他人にアナルに何かを入れるのも初めてで、その慣れない異物感に興奮もしていた。尻がその感覚を確かめるように、実感することを求めるようにひくひくと動く。

「ほら」

突然、顔の前に黒いものが迫ってきた。反射的に目を閉じると、目の辺りが覆われてゴムのようなものを耳にかけられた。どうやら背後にいる男が、透也にアイマスクをしたようだった。

「ちんちんは触れなくても、タマなら触れる」

「剥がすか、絆創膏」

「そうだな——」

「だめっ……」

それだけはだめだ。だって桂川と、守ると約束した。

「ひょっとして、彼氏とかいたりする？」

「っ……」

痴漢 N T R。

「まさか彼女がいるなんてことはないでしょ？」

「このちゃんちゃ満足させられるはずないしな」

左右の男以外からもクスクスと笑う音が聞こえた。

あまりの羞恥に全身の血が沸騰したように熱くなる。

「射精はでいいのかな？」

左の男がおどけた口調で笑い、透也の下着に手を入れた。陰囊を握られ、体がビクンと跳ねる。

「どうだ？」

「うん、小さいけど中身はある」

男が愉快そうに睾丸をコリコリと揉む。

「あああっ……！」

「へえ、目隠しされててもタマ揉まれて感じちゃうんだ」

「っ……あっ！」

別の誰かの手が、今度は尻側に入ってきた。割れ目を指先でなぞられる。

「ヌルヌルしてる。とけたな」

「はやっ！」

「感じやすいんだって」

ははは、と男たちが笑う。

恥ずかしくて、消えてしまいたくなった。

「早く気持ちよくしてやれって。痴漢されたくて乗ってきてるんだから」

「そうそう、期待に応えてやらないと」

「そんな、アッ——やつ……」

くく略くく

「ほら透也、彼らに教えてあげてください」

「なに……」

「この体が誰のものか——さあ、ここは？」

桂川が透也の左の乳首に触れた。

「あ……」

「この小さいながらもツンと起った乳頭。この卑猥な左の乳首は誰ののですか」

「桂川さん……ですっ」

恥ずかしい。男たちの視線から逃げるように目をぎゅっとつぶって顔をそむける。

「そうです。ではこの左よりもさらに感じやすい右の乳首は？」

「っ……」

どうして右の方が好きだと知っているのだろうか。やっぱり痴漢されているところを見ていたのか。

「透也」

「桂川さんの、ですっ……」

「はい。きちんと紹介できましたね。ではここは？
もう説明も自分でできますね？」

ここ、と言って桂川が触れたのは陰囊だった。大きな
手でタマを転がされ、双球がきゅつとせり上がる。

「っふ、は……」

「ああ……なんて感じやすいんでしょう。でも今は感
じている場合ではありませんよ。早くしないと痴漢た
ちに体をいじられてしまいます」

「あっ……」

桂川の手が陰囊から離れた。刺激がなくなり、早く愛
撫を再開してほしくて必死に頭を回転させる。

なんと言えがいいのだろう。「桂川さんのです」とだ
け言っても、納得はされないだろう。

「さあ透也。痴漢たちが股間を膨らませて待っていま
すよ」

「あ……」

つい、男たちの前立て部分を見てしまった。桂川の言
うとおり、全員がそこを膨らませている。

「ほら、早くしないと我慢できず襲われてしまうかも
しれませんよ」

「それはっ……」

「ではちゃんと誰のものが教えて差し上げてください」
勇気を振り絞って口を開く。

「そこ、は……」

「ああ透也。言葉だけではどこだか伝わりませんよ」

「っ……」

そこまですらないといけないのか。

男たちの熱気が上がっているのを、むき出しの肌で感じ取る。

「……ここ、は……」

大きく広げられた足の間に自ら手を差し入れ、陰囊を包む。

「この陰囊は、桂川さんの、です……」

「それではどんな陰囊かがわかりませんが……」桂川の手が、陰囊を持つ透也の手に重なった。「まあいいでしょう。この小さくてかわいい二つのタマは、私に愛されて悦びの白濁を飛ばすためにあります」

「っ……」

「では透也。次はこの紹介を」

桂川の指先が、今にも弾けそうなベニスを撫でた。

「そこ、はっ……っは……」

興奮しすぎて息苦しい。恥ずかしいところをすべて余すところなく見られている。

「そこ？」

「おちんちん……そこも桂川さんのですっ……」

「いけませんよ。それではどんなおちんちんかわかりません。きちんと理解してもらわないと、また痴漢されてしまいますよ。それとも透也は痴漢されたいんです

か？」

「違っ……！」

「ではちゃんと、痴漢たちにわかるように伝えてください」

「っ……はい……」

でも、桂川の言うような淫らな説明が思いつかない。体は限界まで高まっており、頭がまともに働かない。

「桂川さんっ……」

「どうしました？」

「わかりませっ……」

「誰のものかわからないんですか」

桂川の腕を握り、必死に首を左右に振る。

「桂川さんのっ！　けどどんなおちんちんかっ」

「透也はまだ自分の体を客観視できていないんですね」

桂川の親指と人差し指が、反り返ったペニスを優しくつまんだ。

「このペニスは小さくて未熟で、誰の手でもすぐに悦んで勃起してしまう淫乱な性器、ですよ。さあ透也、痴漢たちにわからせてあげてください」

今の恥ずかしい言葉を口にしろということか。

「それともこれから今までどおり、痴漢たちにしごいたりしゃぶったりされたいですか？」

しゃぶられてなんていない。でも今の問題点はそこではない。

「小さくてっ、未熟でっ……」

ハピエンの5万7千字です！

PDF（縦・横各1）、Epub対応。

どうぞよろしくお願いいたします。

あなたの願いを叶えます。 3 —サンプル—

©gooneone（ごーわんわん）

2026/9/1

メール:gooneonegooneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter:@gooneone11

商業情報は『リットリンク gooneone』でご検索ください。

※すべての作品の無断複写・転載・複製を禁じます。

※作品はすべてフィクションです。実在する人物、団体等とは一切関係ありません。

※作品の利用に関して問い合わせた際、十四日を過ぎて返信がない場合でも、許可する旨の応答がない限りは一切の利用を禁じます。